
DIVE

蛭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D I V E

【Nコード】

N 2 9 8 9 A

【作者名】

蛭

【あらすじ】

高校2年、先輩に振られて恋愛に対して興味を失いかけた本城希未は隣のクラスの浅野に「ゲームしよう」と言われた。友情、恋愛、裏切り、嫉妬、期待。全てを渦に巻き込んでいく「恋愛」というゲームを。

#0 序章

途切れない愛が欲しいのならおいで

何もかもが見えなくなる位に愛を捧げよう

いつでも君に

いつまでも君へ

僕からの想いの切符を渡してあげよう

裏切り、悲しみ、憎しみ、嫉妬

全ての行き着く先はなんだと思う？

それは闇なんかでもなくて明る未来でもない

ただの毎日だ

喜び、輝き、微笑み

そんなものでいいのならいくつでもあげよう

行き着く先はけして変わりはないだろうけど

さあ、切符を手にして。

この深い道に行こう。

僕を溺れさせて、そして溺れた僕は君を溺れさせてあげようか

#1 開始 side nozomi

恋愛なんていうと幸せしか思い浮かばなかった

幼い私にはまだまだ苦くて深い渦だった

でも私の気持ちは溺れさせないよ

「ごめんな、彼女いるんだ。」

高校2年の肌寒い秋、私は見事に失恋した。

今までずっとずっと暖め続けてきた心の想いは
たったの「好きです」にしか出なくて

薄々予想していた通りの返事だった。

全部、全部予想してた。

期待ばっかだったわけじゃない。

それなのに先輩の後ろ姿に予想以上に涙が止まらなかった。

これで、――――終わり――？

あつけない。

だったらもつともつと話しかければ良かった

変に告白なんてしなければ良かった

残った想いは雫となって乾いた裏庭のアスファルトに吸収されていく

もう、恋なんてしたくない

そう思った

惨めで情けなくて。

1年半とはいえ想い続けた気持ちはかなり傷付いた

せめて失恋の時ぐらい 静かに泣かせて欲しいのに
乱暴な秋風に髪も心ももつと惨めにされる

さすがにこれ以上は風に当たってられないと思って
足を動かそうとした時

「どーしたの？」

なんて場違いに明るい声が聞こえた

後ろを振り返れば隣のクラスのモテモテ君、浅野 洋平がいた
いつもみたいに自信たっぷりの笑顔を浮かべている

余計だけど私はこんな風に軽そうな男は好きじゃない
顔だって整ってるかもしれないけれど私の好みじゃない

相変わらずの笑みを浮かべて私を見つめている

ああ、最悪

なんでよりによってこんな所で人に会うんだろう

なんでよりによってこんな姿人に見られるんだろう

「別に」

そっけなく答えて足を進めると彼は

「俺ね、さっきね、告白されてたの」

なんて言った。

思いもかけない言葉に彼を見ると

「もちろん振っちゃったけどさ」

笑顔で答えた

「そんでそのまま昼寝してたら、君の告白シーンを目撃しちゃった」

なんてピースして続けた

「……………」

恥ずかしさと惨めさに彼を思い切り睨む

「君なかなか良い振られっぷりだったね。あ、本城さん」

私の目なんて気にせずに笑っている

むかつく

ついでに私の事知らなかったくせに今、私の胸の記名章を指差して
馴れ馴れしく呼びかけられる

「ほつといて」

「冷たいな、せつかく可愛いのに勿体ないよ」

笑いが入った声がする

ああ、胸くそ悪い

足早に無視を決め込んで裏庭から出ようとする

「ねえ、本城さん。さっきの男のどこがいいの？」

いきなりさっきまでとは違う凄みのある低い声が響いた

・・・ように感じた。

「別にさ、かつこよくはなかったじゃんか。」

「俺なんてどう？好きになっってみなよ」

「もっと君に良い顔で振ってあげるぜ？」

3歩進むことに後ろからしつこい位の声

なんだあの男は。

性格歪みすぎだよ

「・・・・・・・・」

無視。 無視。

ただ悔しいだけ。 無視。 無視。

もう後ろからは声は聞こえない

やっと帰ったか

最後に目を擦って裏庭から出る直前
いきなり腕を引っ張られた

「つーーーー!!」

目の前には浅野の顔

というか顔しか見えない

近すぎるんだ。 距離が。

「ねえ、君さ、どうせもう恋愛なんてしたくないだろ？」

私の目を捕らえないでよ

浅野が喋ると息が唇に掛かる

私が眉間にしわをよせると彼は

「わかった、わかった」

なんて笑いながらいつて少し離れた

そのまま私の腕を掴んで言う

「だったらさ、俺とゲームしよう」

「・・・・・・は？」

「もちろん恋愛というゲームを少し、ね？」

恋愛なんてゲームだ

そう思っていたのは自分なのに

実際口に出して言う人間を見るとなんだか嫌な気持ちでした。

少しずつ、少しずつ

私は動かされていく

私の人生の渦からは逃げることなんて無理なんだ

#1 開始 side nozomi (後書き)

読んで頂きありがとうございます^^

まだまだ未熟文で申し訳ありませんがこれから頑張ります。

#2 契約 side nozomi

泣いたら泣いただけ
笑ったら笑っただけ。

別にそれが影響することは何もない

「ゲーム？」

私が聞きかけると彼は真顔で「そうだよ」と言った

「本気？」

「もちろん。」

「本気で言ってるのなら浅野君少しおかしいよ」

私が冷たく言い放つと

「あれ？俺の名前知ってたの？光荣、光荣」
なんてますます自信ありげにつぶやいた。

「・・・」

本当に話しづらい男

なんでこんな男がもてるんだろう。

「ねえ、そんな難しく考えないでよ」

「・・・・・・・・」

「ただの『ゲーム』だ」

「（ゲーム・・・・・・・・）」

「あのさ、俺ね結構もてるんだぜ？君には嫌われてるみたいだけど、だから色々面倒なんだよ、振ったり慰めてやつたり。ウンザリなわけ」

「あっそう」

「まあ、もてたことない人にはわからないんだよ、この気持ち」

「・・・・・・・・（むかつく）」

「結構辛いんだぜ？振るのも。だんだん敏感にもなってくる、仲良い友達から告白

なんてされたらたまないんだ。せつかく良い友達だったのに、もうギクシャクだ」

「・・・・・・・・なんでゲームの相手を私にするの？」

「そりゃ君が気に入ったから」

不意をつかれた

こんなこと真剣にいつてるわけないのに
思わず心臓が動いてしまいそうになった。

「恋愛のゲームなんてすることないじゃん」

咄嗟に出た言葉に彼は待つてましたとばかりにまた笑った

「ゲームだからいいんだよ、理由なんていらない。君はどうせもう
恋なんてする気ないんだろ？俺はつまないんだよ、毎日が。もち
ろん君も恋愛が無くなると少なからず人生はつまらなくなるよ。き
つと。」

「・・・うん」

「だからそこでゲームだ。君は俺とゲームすることによってもしか
したら恋愛の楽しさまた

見つけられるかもしれないし、恋愛がしなくなるかもしれない。

俺は君といることで女子からあまり寄られなくなる。楽なんだ。

それに自分に興味なさげの子を墮としてやるという楽しさもある」

まあ明らかに君のメリットは少ないけどさ

俺が楽しそうだからいいじゃん

なんて付け加えた

「はあ・・・」

なんだか長つたらしい意味の分からない説明にため息をつく

「そこでゲームには必ずルールがあるだろ。

ルールは俺と少なからず話すこと。

俺と一緒に帰ること。

周りには付き合ってると思われるくらいにね、じゃないと女子が寄ってくるし」

「なっ・・・」

「んで次に一番の楽しみ、勝敗だ。

もし君が僕に本気で惚れたら君の負け。

もし俺が君に本気で惚れたら俺の負け。その時点でもう終わりだ。

まあ後者はたぶんありえないけどね、もし俺が負けたら君に賞として俺からの一生の愛あげるぜ」

ああ、そう

やっとわかったわ、君歪んでる。

もう直せないよ、その思考回路。

ただそれを自覚していてその上自信ありげに笑うところがたまらなく憎い。

そんなに自信たっぷりならいいよ、乗っただけようかその「ゲーム」に。

どうせ私は君を好きにならない、否なれない。

思い通りにいくことばかりじゃないんだよ、

ふとさつき振られた澤田先輩の顔を思い浮かべた

どうせまだ私は彼を諦められない

なら適度に忘れさせてよ

結構あるじゃない私にもメリット。

君を堕としてあげる。

もちろん君の敗北を意味させて

考え込む私に浅野は最後の問いをなげた

「どうする、本城さん。乗りますか？」

「・・・いいよ。乗ってあげる」

いった瞬間彼の形の良い口角が上に上がった

ゲームの契約は解除できない

どちらかが堕ちるまで。どちらかが涙を流すまで・・・ね
きつと。

私はゲームへの切符を手に入れた

#2 契約 side nozomi (後書き)

読んで頂きどうもありがとうございます！
宜しければお付き合いをお願いします

#3 失望 side asano

目の前には仲の良い女友達

いや、もう仲の良かった、と言っべきか？

脆すぎる友情に怒りを感じても

そんな友情しか作れない自分を責めるだけ

人間は本当に脆いものだね

静かな裏庭

いつもなら日当たりが良いはずなのに

今日はいいにく すっきりしない空模様で

どんよりとした空気だ

でも、今の僕にはこのほうがいい

空を見て、自分の胸の辺りに視線を移す

まるで全く同じに見える

思い出すのは前まで一緒になって笑っていた子の哀しそうな瞳

ごめんなんて言えるわけない

誤るんだったら付き合っってと何度言われたことだろう
僕は泣けないから

ただ、ひたすらに自分を責めることしかできない

なんで愛されることがこんなにも辛いんだろう

なんで幸せにしてあげられないんだろう

なんで恋愛なんてものがあるんだろう

なかったらきつとこの痛みもなくなるのに

誰かが言っただけそれが楽しいんだって

それが恋愛なんだって

本当、嫌になるほど楽しいよ

こっちが受け付けなくてもたくさんの想いが溢れかえってくる
もう止めてくれ

少し冷たい地面に体を預けると
いくらか楽になった

見えるのは空だけ

雫を落としそうに落とさない
まるで僕みたいだ

・・・僕はこんな風に広い人間じゃないけれども

どのくらい経っただろう

人の気配で目が覚めた

目を開いてあたりを見回すとくしゃみがでた
こんな寒いところで寝てしまったんだ
当たり前か

そろそろ校舎に戻ろうと思って裏庭の門まで行こうとしたら
バスケット部のキャプテンだっけ、有名な澤田先輩と女の子がいた

ああ、分かるまでそんなに時間はいらなかった
告白ってやつ

人を見るのは初めてだった
あっけなく目の前で振られていく女の子
その子の目からは何かが抜けていくのがわかった

よく見てみると隣のクラスの女子。
たしか僕と同じクラスの奴が彼女を狙っていたから
それでなんとなくわかった。

去っていく「好きだった人」を見て涙を流す姿
惨めだった
惨め過ぎて出て行けなかった

僕もこんな風に人を泣かせたんだ
あまりの罪悪感にどこかがつぶされる気がした

慰めてあげようと思った
本当はそつとすべきだと思っ

あの子を慰めることによって僕が傷つけた誰かの心も許してくれるんじゃないかなんて馬鹿な考えが広がっていった

でも違った

近づいていく僕に辛いほどのオーラっていつのかなにかが必死で僕を避けているんだ

ああ、そう

僕はいつも泣かせるだけなんだね
慰めなんてできない

初めて自分の存在の悪さに嫌になった
なんで女の子は泣けば同情を誘えるんだろう

なんだか目の前の子に腹が立った
別に何を言われたわけでも何かされたわけでもない
ただ、苦しそうに泣いているだけ
僕には全く関係ない

でも僕にとってはそれが無性に嫌だった

恋愛に腹が立った日

恋愛なんていらなと思った日

僕是最悪の状態以最悪の状態の君に出会った
さあ、はじめよう

ここに居合わせただけ

それでも十分だと思わない？

ちっばけな恋愛に遊ばされているなんて馬鹿馬鹿しい
ならばこっちから遊んであげよう

#3 失望 side asano (後書き)

ずれて読みにくくなっていたら文字表示サイズを最小にして頂きたいです。お手数申し訳ありません；

#4 矛盾 side asano

おままごとみたいに格好悪く
なのに契約だなんて格好つけてみたり

契約なんてちゃんとしたものでもないのに
それでも繋ぎ止めたかった
楽しみを逃がしたくなかった

「ゲーム？」

そう聞いたときの君の目には涙じゃなくて
何かが光っていた

僕がおかしいって。
たしかにそういったよね、
君の目はさ。

たしかに自分でも馬鹿なことだった
あんなに興味をなくしたつまらない恋愛で遊ばうなんて
矛盾だ。

それでもどうしてか僕の口からはスラスラと言葉がでた
普段は決して言うことのない
罵倒までした

そこまでして、只でさえ僕のことあまり好きじゃない目をした
女の子を繋ぎ止めたかった。

ゲームがしたかったから。

興味を持ったのは

この子が僕に恋愛というものを求めない気がしたから
いや、そんな子は今までもいた。

現に今でも僕のこと好きじゃない女子はたくさんいる

でも振られたばかりでまるで恋愛に興味をなくした子は初めてだった。
た。

僕と同じ。

ううん、僕以上に冷めた目になつた子だから。

初めて、恋愛の楽しさがわかりそうな気がした
この子の目を冷めた目を暖めるなんて無理な気がする

だから安心と楽しさが同時にある

「君が気に入ったから」

そう告げた途端少し顔を赤らめた君
でも好意を持った瞳はしてなかった。

本当に気に入ったよ

悪く言えば利用だ。

僕はこの子といることで今までの嫌な気持ちから少し逃げられる

この子を利用したいだけだ

もし、この子が本気で僕に堕ちるときは僕が本気でこの子を
堕とそうとしたときだけ

お気楽な恋愛

それがわかったのか女の子は少し笑った
不敵に。

ゲームに乗った。

ねえ、できるのなら本気にさせてくれ
楽しませて。
僕を。

楽しませてくれたらその分ちゃんと返してあげるから。

#5 遅刻 side nozomi

私の朝は一言で言って恥。

寝癖だって、パジャマだってグシャグシャで。

そのくせ寝坊癖。

こんな女誰だって引くかな。

「明日から、よろしく」

そう言っただけで笑ったまま去っていった男。

今日では夢の出来事にしか思えない

だって今、鏡の前に写る私は・・・酷すぎる。

髪の毛なんてごわごわで、寝癖がアリエナイ

いや、いつもはこんなに酷くはないんだよ

昨日は、そう、その夢みたいな出来事で

あ、こういうと素敵な出来事に聞こえるけど全く素敵なことじゃなかった。

まあとにかくすごい疲れてて髪の毛なんて乾かさないでベッドにダイブ

昨日5分乾かせば今朝30分もかからなかったのに。

結局なかなか決まらなくて朝シャンしようかな、なんて思ったときふと見た時計はもう登校時間10分前。これはヤバイ。

ご飯も食べてない

トイレだって、授業の用意もしてない。

慌ててまず授業の教科書をそろえるために自分の部屋に行こうとしたとき

朝聞くともものすごいうるさく感じるインターホンが鳴り響いた

お母さんが不思議そうに玄関に向かうのを横目に私は階段を駆け上がる

あと、3段。

階段を上りきるところでお母さんの普段聞いたことがない

マダムっていうのかな、おしとやかに決めた声が私の名前を呼んだ

「希未、お迎えが来てくださってるわよ」

お迎え?!お母さんの気取った口調も問題あるけれどその内容がもつと問題だ。

私、誰とも朝約束してないよ

とりあえず階段を下りて玄関に向かうと

「わっ!!!!!!!!!!」

ニコニコ顔のお母さんと浅野洋平がいた
浅野?!?!
なんでー!!

「あ、おはよう本城」

「・・・お、おはよ」

朝から爽やかな笑顔を貼り付けて私の玄関にたつ彼はなんだか似合
わなかった

お母さんは一人でやけに嬉しそうに私を見ていた

ああ、勘違いしてるよ

「希未、こんな素敵なボーイフレンドいたら紹介してよね」

「あはは、別に・・・」

「ほら、早く準備しなさい!!」

「はあ・・・」

また階段を上っていく私を浅野は笑ってみてるようだった
むかつく。

てか私かっこ悪いじゃない

下からは相変わらずのお母さんの嬉しそうな声と
それに対応している浅野の声

とりあえず制服に着替えて準備して

時計を見たらもう

あと2分ほどしか残ってない

やばい、やばい

わたし一人だったらいいんだけど迂闊にも今日はなんだか
変な男もいる

遅刻したら私の責任なわけだ

階段を駆け下りていくと

お母さんが浅野と紅茶を飲んでいた

って、何紅茶飲ませてんの

先に行かせておいてよ！なんて思いながら咳払いをひとつ

やっと私に気づいたのかお母さんと浅野がこっちを見る

「希未遅いわよ、浅野君ですって？彼、ずっと待っていてくれたんだから！」

「いえいえ、気にしてませんよ」

「まあ、ほんと素敵な子ね、さあさ、行ってらっしゃい」

・・・？

今の誰の声ですよ

私はお母さんのこんなおしとやかな声も聞いたことないし
浅野の敬語も聞いたこと無い

中学3年、人間の怖さと変わりぶりに改めて驚いた

不機嫌なまま浅野と一緒に玄関を出る

なんだか昨日は気が付かなかったけどこいつ香水つけてる？

風が吹いた時、微かに良い香りが鼻をくすぐった

全く、高校生で香水って変じゃないけど
なんだか大人びてみえて少し悔しかった

無言のまま光がまぶしい道を歩く
すれ違うおばちゃんやら小学生がこっちを見てる

・・・本当の恋人みたいに见えてるのかな。
いや、ないか

だって浅野は私の１メートル先を歩いている
こいつ何気に早足だよ
無言で責められてるみたい。

なんだよ、だったら待ってないで先に行けば良かったじゃない
約束だってしてないし、たかがゲームにこんなおまけがついてるなんて

思わなかった。グリコのおまけよりいらないわよ。

口をへの字に曲げて背中を睨みつける
たぶんもう完全に遅刻だ

だってさっき通ったコンビニの中の時計がそう示していた

・・・睨んで、睨んで、すこし眉を下げる

ごめん。

素直には言いたくないけど遅刻させたのは私の所為だ

背中にそつとつぶやく

その瞬間彼が振り向いた

「・・・遅いんだよ」

何、君。エスパーかと思った

「ごめん、」

「じゃあとつとと歩けカス」

・・・ん？

カス・・・？

言い返そうとしたとき彼がまた振り返る

「ゲームはもう始まってんだぞ。とつとと俺を墮としに来いよ。

あんな朝忙しい女見せなくていいぜ。まあ、俺の負けはなさそうだな。マジで」

「はあ」

「なんだ、まだ寝ぼけてんのか。もうお前本当難しいやつだわ。ま、やりがいあるけどね」

ため息をついてまた歩き出す彼

ため息尽きたいのはこっちだよ

朝がこれほど嫌だった覚えはない
嫌いな男と一緒に歩いて話して

恋人にみせかけたただのゲーム

1日目にしてこんなに疲れるなんて思いもしなかった

#6 公園 side nozomi

人の心は誰でも読めるってわけじゃない。
ただ、なんとなく可能性はある。

嬉しそう、だとか哀しそう、だとか。
でも今横にいるこの男はそれが不可能に思う。

目の前に広がる見慣れているのに入るのは懐かしい公園
小さい頃よく遊んだブランコ
ベンチなんて遊ぶのに夢中で座った覚えがない
だから初めて座っているそれはとても固くて冷たい

手には暖かい紅茶
空はなかなかいい天気

隣には全く関係なかった恋人という名の男
長い足をだらしなく伸ばして座っている
さつきから約15分間このままだ

なんだか息も詰まる
呼吸のたびに触れ合う肩が意識してるとくすぐったくて
なんで自分がここにいいのかわからなくなりそうだ

今頃本当は授業中

「どうせなら2時間位遅刻しちゃおうぜ、2時間目の数学嫌なんだよね」

そう笑って強引に公園に連れ込まれた私

でも私も2時間目の科学は嫌いだから静かに頷いてついてきた

今日は風が無い

だからもちろん黙っていれば沈黙だけ

何の音もしない

そんな中こんなに寄り添って

ベンチに座っている私達は仮にも恋人同士なわけで

心なしか私の心臓は早く脈打っていた

浅野は動かない

なんだかこっちにずっと顔を向けている

見られてるのか、違うのか

私はこんな至近距離を確かめる勇氣もなければ

ずっと気にしないで居られるほど男の子との経験もない

息がしづらい……

さっきから咳払いを何度かしてこの沈黙を埋めている

これじゃあ、私が高んだか浅野を意識しているようで悔しい

そう思っても余計に咳払いの音が響くだけだった

「ねえ、本城さんー」

しばらくの沈黙の後いきなり浅野が口を開いた
そのついでに時計を見るともう40分は経っていた

「もうそろそろ2時間目終わる頃かなーどうする、行く？」

私はすばやく首を縦に振る

そして立ち上がる

・・・と思ったらスカートを浅野が踏んでいて立ち上がれない
「浅野、スカート・・・」

「え？ああ、ごめん」

そう言っても立ち上がらない彼

「浅野・・・立ってよ」

「・・・うん・・・」

なのに立ち上がらない彼
私も立ち上がることができない

「浅野、邪魔！」

そういつて浅野を軽く叩く

・・・叩いたはずだったのにその手はもつと軽く
浅野に掴まれる

「嫌だつて言ったら？」

「はあ？」

「まだここに居たいって。そういつたらどうする？」

「なに言って……」

「俺はもう少しここに居たいんだけど」

「……我儂男だね」

「なあ、本城。も少しいてよ」

「……嫌。私は学校に行くから一人でいれば？」

そういつて空いている手で浅野を今度こそ軽く叩いた
するとすんなり浅野は立ち上がった

「良かった。俺もうお前に惚れたかと思っちゃった」

そう笑って言う男が初めて昨日と同じ顔に変わった

「あ？浅野私を試してたの？」

「ちよつとね」

最低。そう思った
目の前に居る男に

「馬鹿男、試したりしたって無駄」

「なんでー？」

「私の心はまだ澤田先輩だけだから」

「うわっしつこい女は嫌われるぜ」

「・・・あっそ、でもこれだけは言っとく。私浅野の事カッコイイ
って

思えたことないから」

「・・・まあ君の趣味がおかしいんだよ」

「あっそうですかー」

いらだって一人で歩き出す
やっぱりあいつは最低だ

公園の門を荒々しく開けて外に出ようとした時
すごい力で引きとめられた

今、腕がグキツていったんだけど！！

声も出せなくてなんとか頭を上げるとそこには
少し眉を下げた男の顔

太陽の光がもたら薄めの色の黒髪に反射して
男の子とは思えないくらいサラサラに光っていて
それがこの整った顔にとてつもなく似合っている

長めの前髪から私を捕らえる切れ目の瞳が

綺麗過ぎて思わず目を反らす

「……何よ、痛いんですけど」

なんとか出せた声に

彼は腕を掴む力を弱めた

「ごめんな、怒んなって」

「……………」

何その顔。

柄にもなく小動物みたいな目しちゃって

「でも、少し本気だったんだぜ、もう少し居たいって」

薄めの唇から飛び出すその言葉は素直に受け取っていいの？

「……そんなこと言ってたって無駄って言うてんでしょ

今ので3%位は心臓動いたけどね、まだまだ私は墮とせないわよ」

「……………」

「甘いよ、浅野洋平」

「……つぶっ・はははは！！……」

私が口元を上げて言うと彼は何を血迷ったのか笑い出した
ちえっ。少しぐらい悔しそうな顔しろっつの！

「ははは、本当あんだ面白いね。楽しい」

「・・・同い年なんで目下に扱うような口調やめてくんない？」

「・・・！ははっははは！！！」

余計に笑い出した彼に苛立って睨む

こっちが挑発したのに挑発されてどうすんだ、私よ

そう思ったのに彼の顔は挑発なんかじゃなくて
本気で子供みたいに笑っていた・・・？

あ、これも作戦の1つかもしれない
騙されない

口元から自然にでる笑み

こんなに人の気持ちを疑って頭使うなんて
勉強嫌いの私には新鮮だった

#7 孤独 side asano

人の愛が恋しい
人の優しさが嬉しい

何処かで拒絶していても人間には必要不可欠なもの
俺は生きている。

じゃあそれを満たしているのかな？

「じゃあね、今朝はごめん」

それだけ言って彼女は何事もなかったのよう
に彼女の教室へ入っていった

時刻は11時

3時間目が始まってちよつとした頃だ

自分の教室に入る前に鏡を覗き込む
髪を整えてネクタイを少し緩める

ドアに手をかけてドアを開ける
途端に教室からは様々な目

俺には支えきれない想いが募った目線
純粹に喜ぶ友達の目線
嫉妬、憎みに満ちた目線

耳には必ず歓迎の声

だって俺、人気者なんだって。

誰か曰く俺はクラスのムードメーカーらしい
理由は・・・どうせ外見からだろう

そう見えるのはどちらかといえば良いことなのに
それが重い

中身なんて誰も見てくれない
本当は脆いんだよ、俺は

俺は只の臆病者のムードメーカー

「浅野洋平！遅刻ならちゃんと理由を述べなさい！！」

国語だったらしく甲高い声をした教師が叫ぶ
それにつられてもつと笑いが大きくなる

俺も軽く笑いながら自分の席に歩き出す

回りからは「遅せーぞー」なんて笑いながら軽く腹にパンチされる

俺ももつと笑って茶化す

……馬っ鹿みてえ……

皆の笑顔には大半は嫉妬だったり重い感情で溢れているのに
俺はそれを跳ね返す勇氣もなければ
気にしないで居られるほど大雑把じゃない

自分の席に座って思い出したのはあの女の顔

あいつがこんな俺を見たらなんて言うんだろう
俺は孤独だよ

#8 劣等 side nozomi

今日の終わりを告げるチャイムが鳴って
私は欠伸をひとつ。

だって今朝はバタバタしててもう疲れ気味だ。
早く帰りたい。

「あの、ちょっといいですか？」

少しか細い声がして初めは私に向けられたなんてしなかった。
だって何かに脅えてるみたいな声。

私見た目は一応 優しい そうですから。

そのまま下駄箱で靴を出していると今度は肩を叩かれた。
その感触も弱弱しくて初めは鞆がずれたのかと思ったくらい。

なんとなく後ろを振り返るとそこにはすごい美少女。
思わず目を見張った。

・・・なんていうの？ 守ってあげたくなるって感じ？

無意識に彼女の記名章を見ると
何度が男子達の間から叫ばれていた名前。

なるほど、公認の美少女ね。

？で・・・？その美少女が何の用？

なんとなくというか脅えている彼女。

これじゃあ私が何か困らせてるみたいじゃない？

私も少し眉を下げて苦笑いしながら彼女に向き合う

「・・・どうしたの？・・・」

そう聞くと彼女は一瞬肩をびくつとさせて口を開いて閉じた。

うーん、可愛い。

可愛いんだけど、私こういうはつきりしないの苦手なんだよね。

「あの、私今日用事があって、ごめんね、急いでいるんだ」

なるべく優しく言つと彼女は決心したかのように私を見た。
用事なんて無いけど寝たいんだよ、今は。

「あの、用事って・・・浅野君とですかっ？」

「へ？」

「浅野・・・君と付き合ってるんですかっ？」

「・・・・・・・・えええーーーー！！！！！」

予想外の出来事に思わず叫ぶ
何人かの生徒がこつちを見た。

そつだ、私浅野と学校に来たんだ。

見られてることなんてないと思つてたのに。

「つ、付き合つてない！！！」

そつだ、付き合つてるわけじゃないよ！
ゲームだもん。

「本当ですかっ？」

すがりつくような瞳で彼女が前に出てくる。

その目まぶしいよお！！

「ほ、ほんとっ！一緒にいても恋愛感情なんてないから！！」

・・・恋愛感情・・・

そつ自分の口から出た瞬間頭には澤田先輩の顔が浮かんで
ゆっくり消えていった。

ああ、私、まだ。

本当しつこい女だ。

しつこい性格　なんて自分が一番嫌いなのに。

私が俯くとともに彼女は少し頬を緩ませた

「ごめんなさい、誤解してました。でもありがとうございます」

ふんわりとした笑顔で去っていく彼女。

その最後まで可愛くて、しつこい女の私なんか可愛いわけなくてなんだか胸がいっぱいになってしまった。

・・・帰らないと。

静かに靴を履き替えて校門へ向かおうとした。

でも足は動いたのに進まない。

誰かが私の腕を掴んでいるから。

その誰かは浅野洋平なんだって事は見ないでもわかった。

彼のつけている香水の匂い。

本当、心が落ち着くその匂い。

「・・・約束したじゃねえか」

「・・・え？」

「・・・ったく・・・」

そういつて彼は舌打ちをした。

初めて彼を振り返る。

「あそこで待ってる」

そう言って昇降口の小さなベンチに顔を向けて

「俺、鞆とつてくるから」

そう言つて走り去つた彼。

一人残つた私は腕に残る掴まれた感触とよくわからない彼の行動に
ひたすら頭を働かせた。

私、約束？

とりあえず大人しくベンチに腰掛ける。
待たなかつたら彼の事だから私の家まで文句を言いにくそうだ。

大人しく腰掛けたベンチはこないだ座つた何処かのベンチと似てて
冷たくて、固くて。

それでも座つた瞬間心がほつとした。

#9 奇立 side nozomi

一人で座っているとどうしても自己嫌悪。
憂鬱さに勝つ術は今はまだわからない。

ねえ、早く来てよ。

浅野洋平。

「わりい、少し遅れた」

そういつていきなり私の鞆を持ち上げる彼。
え、ちよつと待つて。
意図がわからない。

「ねえ、何してんの?!」

「いいから」

「はっ?!」

手を引つ張られている。

この手を咄嗟にはたきそうになった。

一緒に帰るの?!

他の女子に見られたら!!

もしさっきの女の子みたいなのがまた来たら私困る。

「浅野っ!待って」

「ああ?なんで?約束って言っただろーが!」

「へ?」

その時何人かの生徒の声が階段から聞こえ始めた。
やばい、見られる!

早く帰らないと。

とりあえず今度は私が浅野の腕を引っ張って歩き出す。
今は少しでも早く、少しでも見られないようにここを出ないと。

・・・そう思ったのに。

浅野が動かない。

「ねえ!早く、馬鹿」

「なあ、俺たちゲームしてるんだよな」

「・・・それが何?」

「契約した時言ったよな、登下校は一緒。回りには付き合ってるって思わせるって」

「え？」

あ、そういえば言ってたような気がする。
でも別に今日じゃなくても。

今日から回りにそう思われなくってもいいじゃない。

だって、今は私、はっきりいってあんたのことむかっている。

「約束放棄する気？本城サン」

「……別に今日からそこまでしなくても」

「は？じゃあお前と契約した意味ねえだろ！！」

「……………」

急に声を荒げるこの男。

何？

「俺は周りの女がうざいから、だからあんただって同意しただろ！！」

何、この男。

こんな性格だったつけ。

こんな怒る男だったつけ。

そりゃ私があんたの約束破ってるのはわかってる。
それでも、附におちない。

ゲームってこんなに厳しいものなの？

「っもついい、今日は許してやる。とりあえず帰ろっぜ」

今度は自分から颯爽と歩きだす彼。
前からだけどやっぱり彼の頭の中が読めない。

浅野の跡をゆつくり歩く。

ねえ、浅野。あんたむかつくよ。

あんな必死な女の子いるんだよ。

私だって先輩を想ってた時、あんな可愛くはなかったけど必死だった。

あんなに想われてるくせに、何が気に食わないの？
私にはやっぱり理解できないみたい。

ねえ、浅野。女の子の気持ち重いなんてそんなこと言っちゃ駄目だよ。

「……さっきは悪かった」

「私も、ごめん。約束のこと忘れてた」

「わかればいいんだよ」

あんたの優しさは嘘なの？
あんたのごめんは嘘なの？

ねえ浅野。

私だってゲーム楽しみたいよ。

だって恋愛をかけたゲームなんて他じゃできない。

でもあんたがそんなんじゃない、私このゲームつまんないよ。

少しは私に恋愛をみつけさせて。

今のあんたじゃ私を惚れさせるなんてできない、つまらないゲームだよ。

#10 凶器 side nozomi

なんで？ どうして？

彼の表情は笑っているのに。

私の頭に届くのはそのフレーズだけ。

「ねえ、浅野洋平」

「あ？なんだよ」

少し前を歩く彼を呼ぶと不機嫌な声が
彼の後姿から聞こえた。

「ねえ、こっち向いて」

「……」

無視して歩き出す彼。

「ねえ、浅野洋平」

私が再びそう呼ぶと彼は今度は足を止めてまた不機嫌な声を出した。

「そんなに恋人がいるって思われたいの？」

「ああ？」

「私、やっぱりわかんないよ」

私の言葉に初めて彼がこっちを見る。
その目にはどこか鋭い光がある。

「だから……なんでちやほやされて嫌なのかなって、うざいかも知れないけど

少しは嬉しいとか……」

「思わねえよ」

「何で？」

「しつけないだよ、もてたことのない女のクセに」

少しからかう笑って言った彼。

でもその目は怒りに溢れていて、思わず足がすくんだ。

「女なんて、俺の何もしらねえじゃん」

……。

じゃあ、じゃあ教えればいいじゃん。

そう言おうとしていえなかったのはまた彼が歩き出したから。

「あんたはゲームしてんだから細かいところ気にすんなよ」

「……」

「あんたは俺のことなんて何も思っていないんだろ、だからあんたを選んだんだから」

「……嫌いだよ」

「は？」

「嫌いだよ、何も思っていないわけじゃない。あんたが嫌い、そう思ってる」

少しの間の後、彼の瞳が急に柔らかくなった。

「ぷっ……本城サン、あんた最高だね」

そういつていきなり私に手を差し出す彼。

「なんのつもり？」

「あ？手だよ、手。よこせ」

そう言つて嬉しそうに私の手を無理やり握る彼。

歩幅の広い彼に引つ張られるように歩き出す。
頭は混乱だ。

嫌いといった女に嬉しそうに手を握る男がどこにいる。
目の前にいるのは何？

なんで、こんなに歪んでるんだろう。
なんで人を傷つけて楽しいんだろう。
なんで？ どうして？

彼の手は普通に温かいのに、
なんでどこからそんなに冷たいの。

#11 交差 side nozomi

少しの沈黙が落ち着かなくて。

でも口を開いたらどんな汚い言葉がでるかわからなくて。

ただ苛々と鼓動を早める胸をなんとか落ち着かせようとしていた。

「なあ、本城」

私の家が見えてきたと思った瞬間
ずっと続いていた沈黙が破られた。

「？」

まだ口を開くのが少し怖くて首をかしげると
彼が振り返った。

その目を見た瞬間、何処か胸が一層早く動き出した気がした。

だってなんだか切羽詰まった瞳がそこにあったから。

「……あのよ、その……ちょっと茶飲みに行くか？」

明らかに何とか考えられた言葉にホツとしたような顔をする彼。

……何？

「……私今日疲れてるからもう寝たい……」

そう小さく言って彼を通り越そうとした。

……通り越したはずなのに目の前に見えるのはさっきと同じ誰かの背中。

ふんわり香る香水の匂いに顔をしかめる。

「……帰りたいのですが……」

そう言ってまた通り越そうとした瞬間。

足がすくんだ。

遠い目の前。

遠いのにやたらとはつきり見えるあの人。

大好きだった先輩がいた。

嘘。

嘘、嘘、嘘だ。

だって、先輩が立っているのは
私の家の前なわけで。

え？何。

頭がスパークしそうだ。

先輩の頭が少し動いてこちらを向きそうになった瞬間
誰かに腕を引っ張られた。

「うわっ！！」

この乱暴な感覚。

あいつしかいない。

私の足が引きずられるように来た道に戻る。

「・・・！！浅野！何よ？！」

いつ転んでもおかしくない。

それでも速さを変えない彼に何がなんだかわからなくて思わず叫ぶ。

「ちょ・・・！待ってよ！」

彼に引つ張られている腕がジンジンしてきた頃

もうかなり私の家から離れてきてしまっていてもちろん先輩も見えなくなってしまった。

やっと止まったことに転ばなくて良かったという思いと

なんだか気になる瞬間を邪魔された思いがわきあがってくる。

私が彼とにかく文句を言ってやろう。

そう思っ顔をあげようとした時。

ぐきつと顎を持ち上げられた。

なんだか喉の筋肉がつった感じがする。

思わずむせそうになる私が目を細めて彼を見ると
まるで知らない人のような彼がいた。

「・・・おい、今更逃げ出すなよ」

「・・・はい？」

人の手が顎に当たる感触がなんだか気持ち悪くて
少し顔を歪めると

「もしお前があの方と上手くいきそうになったとしても、
ゲームは終わらせないからな」

「何、何言ってるの？んなわけないじゃない」

彼の目が少し怖くて目を横にずらすと

彼の口元が上がったのがちらりと見えた。

「お前だけを普通の恋愛に戻すなんてことさせないから。
俺と堕ちた人間になろうぜ？」

堕ちた人間。

なんだか嫌な響きに意味がわからないフレーズ。

普通の恋愛になれない？

首を傾げようとした時。

彼の瞳が近づいてきた。

その目をまじまじと見ても何も見えなくて
どこか寂しい瞳だった。

ねえ、何が哀しいの？
何が普通なの？

私、少し君の所為で頭が回らなくなっ
たみたいだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2989a/>

DIVE

2010年10月30日07時45分発行